

家プロジェクトとしてバイオマスの利用促進に取り組んでいます。その一つに堆肥化利用があげられます。まさに朝来市の土づくりセンターがそれです。「耕畜連携農業」の展開により、地域で発生した有機資源を良質な堆肥として地域の農地に還元することで自然循環型農業が可能となります。

地域特性とブランド力

中山間地域に位置する朝来市では大規模農家は少なく、ほとんどの農家が一ヘクタール以下の小規模な農家です。これらの農家が生き残るためには、地域の特性を生かした独自の取り組みが必要とな

ります。生産する作物に高い付加価値を与え、より高品質なブランド品による農業展開が求められています。

朝来市は、清らかな水、美しい緑、安全な土など自然が豊かな地域です。この地域の特性を最大限に生かし、これらを守りながら、安全で高品質な農業を展開することにより、作物の付加価値を高めることが求められます。

この高品質な農業展開の代表となるものが「岩津ねぎ」です。岩津ねぎは既に商標権（知的財産権）等を取得し、全国にブランド名が定着しつつあります。今後はこの商標と地域の伝統・文化を活か

した朝来市の農業と地元の食品加工産業や観光産業が一体となり地域産業の活性化を図ることが必要です。



農業は土づくりから

朝来市では自然にやさしい循環型農業の拠点として、土づくりセンターを整備しました。（施設の概要は2月に全戸配布しましたリーフレットをご覧ください。）

植物は太陽エネルギー、炭

酸ガス、水から光合成により炭水化物を作り、土から養分を吸収し、植物体（有機物）を作ります。

生命を育む土は、自然の総合的はたらきにより作られており、農業はこの生きた土を基盤にして営まれています。作物が最も生育しやすい環境を整えることが土づくりの基本であり、「土づくり栽培」と言われます。肥沃な土に育てるためには、土壌生物や微生物のエサとなる有機物「堆肥」が不可欠です。人間と同様に土も健康を維持するために、堆肥を入れて土壌のバランスを整えることが必要です。

この土づくりセンターで生

調査・研究

産された堆肥は4月以降、当センターと市内のJA等で販売を予定しています。

朝来市では、水稲、大豆、岩津ねぎについて、3年間、モニタリングとして市内23箇所の試験ほ場（約5ヘクタール）で堆肥の散布を実施し土質の



試験ほ場への堆肥散布の様子

変化、作物の生育状況などを調査し、今後の朝来市の農業振興のために役立ちます。

酪農経営者

認定農業者 衣川美芳さん（佐々）



私自身、60頭の乳牛を飼っていますが、排せつ物の処理に苦労していました。牛

に食べさせる飼料を作る農地に還元するのが本来の姿ですが、農地には限りがあり、天候などの問題でなかなか乾燥しないこともあり。一時ストックして、要望があれば岩津ねぎ生産農家などに利用していただいで、何とか処理していましたが、年々処理が困難になり、「家畜排せつ物法」も施行され、従来の処理方法で

は問題があり、畜産経営が困難な状態になりつつありました。

今回、土づくりセンターが整備され、畜産経営に展望が開けたように思います。

土づくり事業は、畜産農家と耕種農家がうまく連携し、発酵処理した良質な堆肥を農家に利用してもらおうことで朝来市の農業全体の発展が期待できる取り組みだと思えます。農業者として大変感謝しています。

とにかく良質な堆肥に処理して、岩津ねぎ、大豆をはじめ、水稲や特産物の生産に大いに利用していただきたいと思っています。

農家の「声」

岩津ねぎ・お茶生産者

認定農業者 池本晃市さん（立脇）



化学肥料ばかり使っていると土の微生物が減り、作物が病気になるやすくな

りますが、良質な堆肥を使用することで、土質が改善されます。岩津ねぎは農薬や化学肥料を減らしてセンターの堆肥を使つて作りたいと思っています。今までは畜産農家から生の糞尿を譲ってもらっていましたが、農地に撒いてすぐには作付けできないし、匂いがす

るので苦情なども出ていました。土づくりセンターでは良質な堆肥ができると聞いていますので、大いに利用したいと思っています。

日本の農業は外国に頼らず、食料自給率を上げないといけないと思います。これは朝来市の農業にもいえることだと思います。岩津ねぎは有名になりつつありますが、全国に通用するブランドに成長して欲しいと思っています。それには市内の飲食店などと連携し、ここに来ればこんな名物料理が食べられるというような仕掛けが必要ではないでしょうか。